
緋弾のARIA +

雨宮木乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア+

【Nコード】

N1805T

【作者名】

雨宮木乃

【あらすじ】

とある経緯によりイーウにいた少年が遠山家に助けられて武偵高に。ここから少年の物語が始まる。 どうなるかは作者次第（笑）

この話は友人が投稿したいが投稿できない状況のため僕が協力して投稿しました
ぜひご覧ください

第1話始まりの章（前書き）

こんにちは 正直作者はあんま手伝ってません

T君の作品ぜひみてください

第1話始まりの章

「僕はもう泣きそうだ」

僕の名前は、楠・A・木乃（くすのき・A・きの）

今はとある任務で青森に來ているが、迷子になったようだ。

それに多分凄腕の武偵に狙われている。

「僕ってそんなに有名だったっけ？」

イーウーと言う組織の一員で色々な悪さもした、それで幹部まで登り詰めた。

でも凄腕の武偵に狙われる事はしてないと思うのに。

「本当についてないな〜今日は」

僕はしばらく逃げて、まいたと思い休んでいたら、どこからともなく銃で撃たれた。

「くそ……いてえ……これデザートか？」

デザート……デザート・イーグル。世界最強の破壊力を持つ銃。愛用する物も多いがここまで上手く扱う人に出会うのは初めてだ。

「早く出頭してくれ！俺にも君と同じぐらいの子供がいる。だから、これ以上君を傷付けたくないんだ」

情け深い武偵で良かった。こういう人は殺しまではしないはずだ。

「それは無理です。僕らはこれしか脳がないし。それに、金に目がくらんで、僕達を売った親に復讐するまでは誰にも捕まるわけにはいかないんです。……わかって下さい……」

「くそ、お前もか…！あれは！まずい！」

そう凄腕武偵が言った瞬間大爆発がおこった。

僕は立っているのもおかしいぐらいボロボロだったのでなるがままに飛ばされたのだろう。

俺は兄さんと幼なじみの星伽白雪と星伽神社の敷地内で遊んでいたら、いきなり空から血だらけの少年がふってきたのだ。

「キヤツ！」

白雪が俺に飛びついてくる。

俺は声も出すことも出来ず、ただ立ちすくんでいることしか出来なかった。

「キンジ！何をしている？運ぶぞ！手伝え」

兄さんのこのひと事で我に返った俺は、少年を運ぶためのサッカーなどでよく見る担架を取りに行く。

「白雪、悪いが手術室と看護師の資格を持っている巫女を3人ぐらい用意してくれないか？」

「わかりました。少し待つててください」

そう言うなり白雪は本堂に入って行った。

しばらくして、白雪が巫女を連れて帰って来て、急いで少年を連れて行った。

手術室についたら医師の免許を持っている兄さんも準備していた。

兄さん達が入って約二時間後、外で待つていた俺と白雪は出てきた兄さんに駆け寄る。

「あの少年は？」

俺の質問に返ってきた返事は

「まだ手術中でも血が足りない。血液型はお前や俺と同じ珍しい奴だ。俺は手術で手が離せないからお前が輸血してやってくれないか？」

「でも…俺達の血には…」

ヒステリヤスモードの事を言おうとしたら

「わかってている、だが今は時間がないんだ！速くしてくれ」

俺が輸血を渋ったら玄関先が騒がしくなってきた。

「お兄ちゃん？お兄ちゃん？大丈夫？どこにいるの！」

いきなり少女が入って来た。

「誰だ？」

兄さんが訪ねる。

「誰でもいいじゃあんか！それよりはお兄ちゃんはどこ！」

その子は周りを見渡し、少年がいる部屋に飛び込む。

「お兄ちゃん!？」

少女が入ってからしばらくして部屋が光った感じがした。

「大丈夫か？」

兄さんが部屋の中に入る。

そこには心配停止してだんだん温もりをなくしている少年がいるはずだった。

しかしいたのは少女と意識がある少年だった。

「血が足りないからどうかお兄ちゃんに血を分けて上げて下さい」

少女が来たときは違つ真剣な口調で頼んでくるので、俺も兄さんも顔を見合つた。

「なんで意識があるのに血を訳ないといかないんだ？」
もつともな質問をする。

「それは私の魔法で外傷や臓器を治しましたが、血は治すことはできません。ただそれだけのことです」

それだけって魔法使えるのは武偵SSRぐらい出はないのか？
こんな少女が使えるなんて。

「君達は武偵の者か？」

「…違つ…わたし達イーウーのメンバー」

兄さんの目が鋭くなる。

「分かつた。正し条件がある」「条件？」

兄さんが言つた事に少女が質問する。

「ああ、君達は傷が治るまでここにいてもらい、治つたら俺と一緒にベルリンの武偵高に来てもらう」

「武偵高に行くのはいいですけど、私達はどちらも12歳ですよ？」
つな、俺と同じ年かよ！

「別に構わない」

いいのかよ！

第2話始まりの章 続編（前書き）

こんにちわ

友達ミスで始まりがだるいことに

前回のお話の続きです

第2話始まりの章 続編

「それじゃあキンジお兄ちゃんも、武偵高に入るの？」
元イーウーのメンバーで医療系の魔法が使える女の子の上杉有紗つえすきありなが聞いてくる。

ちなみに血だらけの少年、楠・A・キノの事を「お兄ちゃん」と呼んでいるが俺の事を「キンジお兄ちゃん」と呼ぶように血はつながってないそうだ。

「そうだな、俺は三年後に東京の武偵高に入るつもりだよ」

「そうなんだ」。なら僕達も三年後に東京武偵高に転校するか？」

キノがやってきて話しに入ってきた。

「本当に？ やった！ お兄ちゃん大好き！」

アリサがキノに抱きつく。

その瞬間キノの顔が痛みで歪む。

「アリサ…痛いんだけど…僕まだちゃんと傷治ってないんだよ？」

「ああ！ そっか！ ごめんね、お兄ちゃん」

「夢…か」

俺は飛行機の中で目を覚ました。今はドイツのフランクフルト武偵高に向かっている途中だ。

「ドイツと言えばキノとアリサか。でもあの二人は、ベルリンだったよな。あれから3年もたったのか」

どうしてドイツに向かっているかと言うと魔剣フェアラントルの逮捕依頼。どうにも人手不足と相手が強いから東京武偵高の一年のランクSが選ばれたらしい

問題が俺だけ名指しでフランクフルト武偵高の人に選ばれたと言うことだ。知り合いはベルリンにしかないのに、誰だろう？

「キンジ〜！ こっちこっち〜！」

フランクフルト国際空港についた俺を迎えてくれたのは、ベルリン

にいるはずのキノだった。

「キノ！なんでお前がここにいるんだ？」

「それは、今回の依頼の魔剣デュランタルが僕の幼なじみだからだよ」

キノの声は真剣だった。からかっているわけではなさそうだ。

「アリサは？ベルリンか？」

アリサがいないのでアリサの事を聞くとキノの顔が曇る。

「アリサは…カナさんと一緒に死んだよ」

カナはHSSの兄さんの事だ。

「嘘だろう？カナは確かにあの事件で死んだけど、アリサの名前なんてなかった！」

「アリサは、治療の他に占いも出来るんだ。それでカナさんに死相でてるって言って飛び出したきり帰って来ないんだ。だから上の判断で死んだ扱いになってるんだ！」

キノの声が怒りで震え目からは今にも涙がこぼれ落ちそうだった。

「でも僕は諦めないよ。きっとどこかで生きてる。怪我をして動けないだけで、自分で自分を治すのは難しいらしいから。もう少ししたら帰ってくるよ」

キノはそう言うなり、俺の荷物を持って外に向かった。

「僕の手があるからそれで、フランクフルト武偵高に行くよ。そこで今回の依頼のパーティーを紹介するよ」

キノはこの話は、これ以上すると言っているんだろう。

それにしても、フランクフルト武偵高、どんなところなんだろう？

第2話始まりの章 続編（後書き）

今回はミスりました

つぎは友人にきつくいっておきます

では、さよなら

第3話 作戦会議（前書き）

こんにちわ

自分と友人の最近のやりとり -

ス「なあ、もっと話長くしない」

友「それは難しいかな」

ス「なら、投稿しないよ？」

そんなこんなで頑張らせながら書かせています（笑）

第3話 作戦会議

「ここがフランクフルト武偵高…」

俺の前にあるのは最近できたと思われる、真新しい校舎だった。

「5年前にできたから寮は使っていない部屋が結構あるんだ。でもキンジは悪いけど、僕の部屋で寝泊まりしてもらおうよ」

それはそうだろう。こんな一年一人に客間は出さないだろ普通は。それに知らない人が周りにいるより、キノみたいに知っている人がいる方が心強いし。

「4人部屋だけど2人しかいないから安心してね。それに同居人の子が今回の依頼のパーティーの3人目だから」

「お前って個室じゃないんだ」

勝手に勘違いしていた自分が恥ずかしいよ！

「キンジが動思っているか知らないけど、同室の子にHSSの事は言わないでね？僕は隠しておきたいし、なってもほぼ制御できるから」

俺も隠しておきたいに決まってる。そう心の中で突っ込んでおく。そして綺麗な寮の最上階についた。

「ここが僕の部屋。少し待っててね。中確認してくるから」

中の確認？何をするんだろう？そう思っていたが、ドアから出てきたキノを見て部屋の中の確認もHSSを隠しておきたいとわざわざ言った理由も分かった。

「神崎・H・アリアよ。あんたがキンジね？何だか頼りなさそうね。まあSランクの武偵同士仲良くしましょう」

いきなり女子が出て来たのだ。それも小学生の身長ぐらいしかない、アニメ声のピンクのツインテールをした子が。

「ただ人手不足何だよ！それにこの子がSランク武偵？色々大丈夫なのか？フランクフルト武偵高！」

俺が色々考えていたら

「キノ！キノ！速く行くわよ！あら武装解除してるの？まあ私がいたら問題ないけど」

「まあまあ、キンジにまだこれからの説明してないから。キンジ、これから『遠山キンジ歓迎会』という名の作戦会議を開きに行くよ。一応歓迎会だけどしつかり作戦はねるから」

作戦会議、俺も武偵高に入ってから何ヶ月か経つが、一度も経験したことが無いことの一つだ。何だか少しワクワクする。

「キンジは俺と同じベレッタだったよね？」

「同じかどうかは知らないが、ベレッタだ」

俺のベレッタは、既にアムドの平賀さんに、俺専用に変更して貰ってるから同じではないだろ。

「弾の大きさが同じか聞いたただけだから、同じなら僕のをあげれば済むね」

そんなことを言っていたら、大きなレストランに着いた。

「いらつしゃいませ。あつ！楠様また何か事件ですか？」

入ったらすぐに日本語で話すウエイトレスが、やってくる。どうやら日本人向けの店らしい。

「いつも、いつも聞くなつて一度も教えたこと無いのに、いいからいつもの部屋入れる？」

「もちろんですとも！」

キノはこの店の常連客らしい。

後から聞いた話によると、何も無い日にここにご飯を食べに来ていたキノが、いきなり来た強盗を一瞬で片付けたらしい。それからキノは良くこの店で作戦会議をするようになったと言っていた。

「今回の相手になりそうなのは、前にも言ったけど魔剣、デュランダル。僕の幼なじみだから情報は多い。まずは魔剣は超能力者、種類は氷を操る」

「氷・・・それなら銃を氷で固められたらおしまいね」
いきなり上級者の会話が始まった。

「その通り！でも今回のミッションで銃を使う事は少ないと思うよ」
「なんでだ？」

「なんでよ？」

「それは、クライアントがドイツのネルトリゲンという村にいるからだよ」

ネルトリゲン、俺も最近一般科目の地理で習ったが、村全体が円い形して外からの守りが固いそうだが、今観光地の一つにしかなくなってなく意味はなさそうだ。そしてネルトリゲンは中世の影を残す大事な建物が多い。〓銃は建物を撃つおそれがあるということだろう。

「ネルトリゲンねー、確か錬金術師のリンドがいたわよね？」

「その通り！今回のクライアントがそのリンド。魔剣から脅迫状が届いたらしい。魔剣は誘拐犯だからね」

「錬金術師なんかいるのか？」

俺は思わず立ち上がる。

「超能力者がいるのに、錬金術師で驚くとはキンジもまだまだだね」

キノ達にとっては当たり前らしい。アリアも「キノの推薦があるから期待してたけど残念ねー」などぶつぶつ言ってる始末だ。

「まあいいや。ご飯食べたらずくにミュンヘン武偵大に行つて準備を整えて、クライアントのそこに行くよ！一応脅迫状の日にちまでは5日あるそうだけど、念の為明日には合流するから」

というキノは既にご飯を食べ終わっていた。

そしてロジに迎えに来てもらつたため電話をして、迎えが来たら三人で一旦フランクフルト武偵高に戻つてミュンヘン武偵大に行ったのだった。クライアントのそこに行くよ！一応脅迫状の日にちまでは5日あるそうだけど、念の為明日には合流するから」

というキノは既にご飯を食べ終わっていた。

そしてロジに迎えに来てもらつたため電話をして、迎えが来たら三人で一旦フランクフルト武偵高に戻つてミュンヘン武偵大に行ったのだった。

第3話 作戦会議（後書き）

どうでしたか

友人の地理の力

これからはなるべくオリジナルですすんでいきます

それでは

第4話 友人？と依頼者（前書き）

こんにちわ

今回は短いです

ではどうぶね

第4話 友人?と依頼者

ミュウヘン武偵大はどちらかと言えば東京武偵高に近く、少し年期を感じるが施設は最新の物ばかりだった。

「キノザムライ〜来るのが遅い!何分俺を待たせるのだ!」

「なんだ?君は誰?」

キノは冷たくあたる。

彼の名は、マスタング・アルメルダ。ミュウヘン武偵大の生徒で何かとキノ達につきまとうらしい。そしてキノザムライとキノの事を呼ぶのでキノは、アルメルダの事を無視しているらしい。

「いいんだな?俺にそんな口を聞いて、あの頃の事を」

続きを言おうとしたアルメルダにキノは、銃を向ける。

キノの銃は、SIG SAUER - 通称シグ。

エリート御用達の名銃で多くの者が使っていた。

しかし、3年前にシグの特権を誰かが買い、使用及び所有が禁止となった。ある3人を除いて・・・

3人はコードネームしか分かっておらず、NAOE、ホワイトタイガー、そしてキノだった。もしかやと思っていたが、まさか本当にキノとは思わなかった。何故NAOEもホワイトタイガーも居るかどうかも分からない、伝説の武偵だからだ。

「わ、分かった!分かったからそれしまえって!なっ?」

「分かったなら速くネルトリゲンまで案内してください。いいですね?」

昔からそうだがキノは、口調の区別がしっかりしていて、その場の空気が読みやすい。だからこっちも、何をすればいいかわかりやすい。今は黙っているのがベストのはずだ。

そしてアルメルダの車でゆれること数時間。目的の町、ネルトリゲンについたのだ。しかし町には人の気配がしなかった。

町に入ってからすぐに、人が走ってきた。

「あなたがたが、武偵高の形達ですね？私が依頼人のリンドです」
リンドと名乗るのは、予想していた白髪だらけの八十歳ぐらいのお
じいさんではなく、30前後のおじさんだった。
そしてリンドは、隠している事実を教えてくれた。事件に関係ない
けど。

「私も本当は日本人なんだ。だがある事情でここでは、リンドと名
乗っている。もうおかしいが、一応言っておこう。はじめまして。
私の名は、言峰綺礼だ」

第4話 友人？と依頼者（後書き）

今回は次回のためにわざと短くして話を切りました。

次回をお楽しみに

第5話 戦闘開始 そして様々な事（前書き）

こんにちわ

今回は友達自信がある作品です

第5話 戦闘開始 そして様々な事

意外な事実を聞いていたら

「ドカン、ドドン！」

いきなり町中で爆発が起きたのだ。

「これは、私の錬金術ですから敵が来たようです」

「もう・・・ですか。町に人がいないのはあなたがしたんですよね？ 迎撃よりの錬金術があるなら、捕獲ようもありますよね？」

キノはいたって冷静に状況判断していく。

「その通りです。町の中心の教会に用意しています」

キノは、言峰綺礼の話を聞きながら戦闘の準備をしている。キノは日本刀を二本背中の腰辺りにほぼ真横にしてクロスでさしている。

銃は、SIG SAUERを右腰にベレッタを左腰につけている。

「キノがその格好するなんて、デュランダルはそんなにやばいの？ アリアが驚いたように聞く。

「まあね。今回はキンジがクライアントを守って、アリアが他に一般人がいないか確認。僕がデュランダルと一騎打ちする予定だから、一応フル装備で行くよ」

準備が終わるとキノは、爆発があった方へ走っていった。

アリアはアリアで声を上げて町の中に消えていった。

「リンドさん？ 言峰さん？ 近くに自由に使える建物はありますか？」

「リンドでいいよ。私の家がこの近くにあるので、そこなら好きに使って下さい」

俺達はその家に行く事にした。俺達はその家に行く事にした。

「おーい！ ジャンヌ！ 出て来いよー！」

キノは爆発で壁が焦げている住宅街にきていた。

「キノ」

家の物影から、デュランダルことジャンヌダルクが出てくる。

「裏切り者のお前が、よく私の前に出てくれたものだ。アリサからある程度は聞いているが・・・その・・・生きていて良かった」

ジャンヌの最後の呟きは、爆発によってキノには聞こえなかった。

「ジャンヌ・・・大人しく捕まってくれないか？今は、司法取引もあるから来やすいと思うよ？」

キノの口調は、落ちついていて説得力はあった。

「それは無理だな。それよりキノお前がこっちに帰ってこないか？

お前は元幹部だ、そう悪く扱われないだろう」

キノは答えなかった。しかし迷っている訳ではなく、いつでも攻めにいけるよう集中しているだけだった。

「最後に、ジャンヌ！あなたを誘拐及び公務執行妨害で逮捕する！」
言い終わるとほぼ同時に駆け出し、SIGSAUERとベレッタを抜きジャンヌに発砲する。

「キノ！キノ！」

キノが発砲した弾を当たり前のように切り落とすジャンヌ。

それでも徐々に徐々にジャンヌを教会に追い詰めるキノであったが、ジャンヌも負けてはいない。氷を操る魔女でもある、ジャンヌがキノの手にあるSIGSAUERとベレッタを氷漬けにして、使えなくする。

「なかなかやるな！でも剣技も結構自信あるんだよ！」

そういつて腰の刀を逆手持ちで抜く。

「名も無き剣で私と私の剣デュランダルに、勝てると思うなよ！」
そういつてジャンヌは、キノに飛びかかる。

キノはジャンヌの一撃を、手をクロスして二本の刀で受け止める。

鏢迫り合いになると思われたが、ジャンヌがキノに息を吹きかけてキノの手を凍らせにかかる。

それをバックステップでかわし、中央の教会に向かって逃げる。

「待て！キノお前もイーウーにつれ帰る！」ジャンヌはキノに続いて教会に入るが、そこにはキノの姿はなかった。

「キノ！どこに隠れている。剣技で師である私に勝てる訳が無かる

うに！大人しく捕まらないか？」

ジャンヌが教会の、真ん中まで歩いてくる。

その時に異変が起きたのだ！教会を中心にネルトリゲン全体が青い錬金陣が現れたのだ！

直感でその場を離れようとするジャンヌだったが、思うよに体が動けず錬金陣の真ん中で固まっていた。

「私も一般人なら少し抵抗があるが犯罪者なら別だ。すまないがその犯罪者、私の実験のモルモットになってもらう」

いきなり現れたのは、キンジと居るはずの lindo だった。

「少し痛いかもしれないが大丈夫だ。成功すれば死なないだろうから。もつともこれが成功した試しなんて無いのだがね」

それを物影から聞いていたキノがジャンヌに向かって駆け寄り、勢いそのままに回し蹴りを喰らわし、中心から離れさす。

しかし変わりにキノが身動きできなくなってしまった。

それにきずかない lindo 事言峰綺礼が何か呪文的な言葉を言い始めた。

「素材は銀と鉄

土台は石と 契約の大公祖は我が偉大なる師 シュヴァインオーグ 激しい逆風からの庇護

全ての門を閉じろ 王座を発て 王に従い分岐を巡れ

満たせ 満たせ 満たせ 満たせ 満たせ

それは五度繰り返し返される全ての時はただ壊されているに過ぎない 定理。

汝は我に全てを委ね 我が意は汝の剣に全てを委ねる

<それは身体を礎とし 汝がその意思と理性に従うならば応えよ

<誓約はここにあり

<我は全世界の善なり

<汝は三の言霊を抱きし天空なり

ここに 抑圧されし円環より 竿秤の守護霊の力をえよ - !」

言い終わった後ようやくジャンヌとキノが入れ替わって居ることに

気付いた言峰は余り驚きはしないがめんどくさそうにキノを見る。

「キノ！キノ！返事をしろ！頼む！」

完全に錬金術が発動したので誰もキノに近づけない。

「ふっふっふ。人が変わったがこれで今回も実験ができる。

今回こそ成功してくれよ！」

「くっ！やめろー！入ってくるなー！うわー！うわー！」

キノの悲鳴が教会中に響きわたる。

「くっ！キノ・・・仕方ない、もう迷っている暇はない！一か八かだ！」ジャン又はそう叫び目をつむり集中する。

「何をやる気だ？小娘！もう人間ごときがもう何をしようと思いのだ！さつさと諦めて恥もかえりみず逃げるがいい！」

言峰の言葉など完全無視する。

「素材は我が魔力と鉄

契約の大公

祖は我が偉大なる師エリカ・ブランデツリ

激しい逆風からの庇護

全ての門を閉じろ 守れ 守れ 守れ 守れ 守れ

それは五度繰り返し返される全ての時はただ壊されているに過ぎない
定理。

汝は我に全てを委ね 我が意は汝の剣に全てを委ねる

それは身体を礎とし 汝がその意思と理性に従うならば応えよ

誓約はここにあり

<我は全世界の善なり

<汝は三の言霊を抱きし天空なり

<来たれ アスカルドの守護神 - !」

そう言うなりジャンヌの目の前に真っ赤な錬金陣が現れる。

そして錬金陣が杖をもった少女が出てきた。

「私の名前はイーリス。私達守護霊は主である貴女を守り、力になるために存在します。さあ！我が主ジャンヌよ！我にご指示を！」
いかなり少女はジャンヌに語った。

何なんだ？この子は？

第5話 戦闘開始 そして様々な事（後書き）

さてさて、友人は言いました

「キノの旅を見なさい」と

まあ関係ないですが 次回はようやく設定が見えてきます

第6話キノVSジャンヌ終盤(前書き)

こんにちわ

今回は友人がケータイ没収されてたので遅くなりました

第6話キノVSジャンヌ終盤

「やめろー！来るな！入ってくるなー！ー！ー！」

キノ声が、さらに大きくなる。

「イージス！キノを、あの苦しんでる少年を助けてくれ！」

ジャンヌがイージスに命令する。

「分かりました。マスター」

イージスはジャンヌには触る事も出来なかった、青い錬金陣の中に
いとも簡単に入って行く。

そしてキノの頭に手を添えた瞬間、イージスの顔がこわばる。

「こ、これは！・・・マスター、この子が無傷で助けるのは無理か
もしれません。でも必ずこの子を助け出します！だから安心してく
ださい」

イージスはキノから少し距離をとり。

「我が名は、アスカルドの守護神イージス！オーデインよ！トユ
ルよ！この少年に神の加護を与えたまえ！」

言った瞬間キノの上空から黄金の光がキノに落ちる。

「っ！キノ！イージス！本当に大丈夫なのか？私には、とても大丈
夫には見えないのだが」

キノにあっていた光は徐々に小さくなっていき青い錬金陣と共に消
え去った。

「キノ！」

ジャンヌは、キノに近づこうとするが

「マスター！おとまり下さい！」

イージスに遮られる。

「どけ！お前は主である私の言うことが聞けないのか！」
ジャンヌがイージスの制止を振り切った瞬間。

「ジ、ジャンヌ…来るな！ここから逃げろ…くっ！速くしろ！その人ジャンヌをつれてここを離れ下さい」

そう言い終えたとたんにキノの身体から力が抜け両手が垂れ下がる。「キノ！？離せ！離せー！離せー！」

イージスはジャンヌを連れ教会がをでるが教会の中が、見える位置まで行って止まるる。

「イージス！何故キノを助けない？」

「あの少年の中には、守りの神の力が入れられました。普通の人間なら後形も無く消し飛びますが、彼は少し特殊で抵抗している間に、マスターが私を呼んだので神の加護を彼に与えました。あれがあれば人間は神の力をてにいれても、人の形を保つ事が出来ます。ただ最初の方は、神の力をコントロールする事ができず暴走するでしょう、なので巻き込まれない所まできたんです。でも守りの力なので大丈夫です使い方次第ですが」

「おーい。誰かいませんか？」

その頃アリアは、未だに街を歩き回っていた。

「よし！これならいいか。速くキノに合流して、デュランダルを逮捕するぞ！」

そして元気よく教会に向かおうとしたとき、近くから物音がしたので速くキノに合流したいという衝動を抑えて、物音がした方へ行くのだった。

「っ！っ！っ！」

物音がした所にいたのは、壁と赤い錬金陣に挟まれ身動きがとれないキンジが、口をパクパクしうめいていた。

「何があつたのよ？キンジ！」

キンジはいままで的事を簡単に話した

「リンドが敵！どういう事よ？まさかあんた、リンドにやられたっ
ていうの？確かにこの手の錬金術を使える人間はさほどいないけど
でも……」

アリアがひたすらキンジがやられた相手とリンドを比べていたら、
いきなり地面が青色に光り錬金陣を完成させるかさせないそのあた
りでキンジが抜け出すことに成功した。

「アリア！何している？早く教会に向かうぞ！キノが危ない！」
そう言うなりアリアをほつといて走り出す。

「やめるー！入ってくるなー！ー！ー！」

教会に近づくにつれはつきりとキノの悲鳴が聞こえて、焦るキンジ
とアリア。でもリンドが仕掛けていたトラップから出て来た、人形
達の相手をする事になったのだ。

「キンジ、サポートしなさい！狙いは足よ！頭撃つてもどうせ死な
ないから、無駄弾だわ！足を使い物にならないようにするのがベス
トよ！」

「わかった。俺は右側をやる。アリアは左側を頼む！」

「わかったわ」

2人は教会に近づいているけどまだまだで、キノの悲鳴が聞こえな
くなったことでの焦りで後退し始める。

「なっ、なんて数よ！これじゃあきりが無いじゃない！キンジ何と
かしなさいよ！」

アリアは、押され始めてできたストレスをキンジにぶつける。

「俺に言われても困る！俺はキノみたいに完璧に出きないんだ！」

その瞬間教会に黄金の光が落ち教会の一部が跡形も無く消え去った。

「キノ！？」

2人は同時にキノの名前を呼び、目の前の敵を一瞬で倒す。

「アリア！」

「わかってるわ！」

この時の2人の意気は、恐ろしい程あってリンド事言峰綺礼の下部の人形達はあっという間に消え去って行った。

そして教会に後少しというときに、2人の目の前の家が爆発した。

「きゃあつ！」

「アリア！」

キンジとアリアは、爆発の時怪我をするがどれも致命傷ではなかった。

それにキンジは飛んでいる中アリアの頭を抱いて落ちる時に頭から落ちるということは防いでいた。

そしてキンジは、家の壁に激突したときに意識を失いアリアは、爆発の時には意識を失っていた。

「うっ、息がしにくい」

先に目が覚めたのは、キンジの方だった。

「アリア？」

キンジの上にはアリアが意識を失っていた、キンジの頭の上にちっちゃな胸を押し当て。

「これはヤバイ！速くどうにかしないと」

状況に気づいたキンジはどうにかしようとするが、逆効果だった。

「うっ、うっん」

アリアが起きたのだった。

「おはよう。キノ。今日の朝ご飯は何？」

自ら離れていったので、安心するキンジだが血流を確認しダメだったことを悟る。

「おはよう。アリアはでもいつまでも寝ぼけているんだ？速くキノを助けに行くぞ！」

（あーあ。やっちゃった！あんなに低い声出してアリアが引いているし、まあでもこれでキノ並みの戦闘力にはなれたかな？）

「えっ！？そうね！そうしましょ？」

アリアは自分がまだ寝ぼけているのかと顔叩いて起こそうとする。

そして教会についた時2人が見た光景とは？

第6話キノVSジャン又終盤（後書き）

どうだったでしょうか？

友人的にはかなりの出来らしいです。僕もこのオリジナルはすごいと思います

感想待ってます〜BY この作品の作者（友人（笑））

第7話 もう1つの戦い(前書き)

こんばんは

オリジナルですね、これ

では、どうぞ

第7話 もう1つの戦い

ここは、イギリスのウエールズ、イーウーにも知られてないジャンヌのアジト。

ここに、ジャンヌはキノを運んで休んでいた。でもキノは、倒れてからずっとうなされていて原因はイージスにも分からないらしい。

「キノ…早くよくなれよ…」

ジャンヌが呟いたその時。

「理子さん登場！キノ大丈夫？つて寝てるよ〜！」

入って来たのは、キノのもう一人の幼なじみで家族としてイーウーと一緒に暮らしていた、峰・理子・リュパン・四世だった。

「なんでお前がここにいるんだ？」

ジャンヌは、眉間にしわをよせて訪ねる。

「なんだ〜、ジャンヌもいたんだ。いいじゃんここは、キノとジャンヌと私の家なんだからいつ帰ってきてても」

理子は、ジャンヌの顔を見ずに言う。

「それもそうだが、尾行は大丈夫か？特になんとアリサ」

ジャンヌは玄関を見ながら言う。

「大丈夫！大丈夫！一応いつとくけど、キノは行方不明扱い、捜索も早期打ち切り。でもイーウーには連れて行かないからジャンヌがなんと言おうとも」

理子は真面目な口調で言う。

その時玄関からイージスが入ってくる。

「お客さんですか？マスター？私は、アスカルドの守護神イージス。以後お見知り置きを」

「成功したんだ〜！やっぱり守護神かあ。この本は、本当に不思議だね。読む人によって書いてある言葉が変わるなんて」

理子は、鞆から辞書程の厚きさの本を取り出す。本にタイトルなど

はなく、表紙はただの緑の厚紙だった。

「そうだな。そう言えば、私はお前の精霊を見たこと無い気がするんだが？」

「そう言えばそうだったね！？でも今は、他の事頼んでるからもう少し会わせられないかな？」

ジャンヌは不思議そうに、イージスは納得したように理子をみる。

「イージス少し席を外してくれないか？」

「やっとなれするんだ！理子待ちくたびれたよ〜！」

イージスは不思議そうな顔しながらも部屋を出て行く。

「最初はグジャンケンポン！」

ここは、イギリスのウエールズ、イーウーにも知られてないジャンヌのアジトで寝ているキノの中。

「ここは？」

キノは、上も下も右も左も真つ赤な世界で目を覚ました。

そこには、宝石だらけの鎧に身を包んだ人間がいた。

「君のような弱い男の中に入るとはな。まあいい男の中に入るのもいいかもしれない」

興味深くキノの身体を見ている。

「あなたは？」

「私の名前も分からないのか？でも許してやろう。私の名前は、
だ。」

その時何故名前が聞こえなかったのかは、分からない。でもその女性
性は美しく、かっこよかった。

「どうせ君には、私の名前は聞こえないだろう？余談はこのぐらい
にして本題にはいる。お前の身体をもらおう」

「えっ！それって奴隷にするって事ですか？」

キノは、どう読み取り何を妄想したのか分からないが、顔を真つ赤
にしたまま神を見ていた。

「？君はバカだな。ここは、君の心の世界だ。本来ここには、1人

しかいれない事になっている。正しくは、違うんだが。それなのに、今ここには君と私がいる。もう分かるだろう？」

「はい。何となくは。でも僕、武器持って無いですよ」

「そのことか。私も鬼ではない」

「それはそうですよ！神様なんですし！」

「本当に君はバカだな。それはほっとくとして、君は二刀流だったね？」

キノの目の前に、二本の日本刀が出てくる。

「勝った方がこの身体の持ち主でいいか？」

キノは、日本刀を持ちながら答える。

「いいですよ〜！神様！」

キノは、地面を蹴り神に切りかかる。

「ふっ！直線的で実に面白い！」

神は手を前に突き出す。そうしたら、そこに青い魔法陣がでてきてキノの攻撃を防ぐ。

それからキノ猛攻撃が始まるが、全て魔法陣で防がれてしまう。

「そろそろ諦めたらどうだ？大分苦しそうに見えるが？」

余裕の笑みを浮かべ神は訪ねる。

「はあはあ。僕は諦めない！僕は、アリサやジャンヌや理子のような家族や仲間達を守らないといけないんだ！」

「何が仲間だ！そんなものいて何になる！？」

神は急に声を荒げてキノに言う。

「ならなおさら僕は、貴女に負けるわけにはいかない！」

最初より強く地面を蹴って、神に切りかかる。

「やはり君はおおばかものだ！」

キノは神の魔法陣に当たる前に右の刀を振りおろし、それを元の上に飛び勢いで回し切りをした。

「なっ！」

神は、目をつむり覚悟をしたが痛みはいつまでも来ない。

そして目を開けて見たものは、首に当たる寸前で止まった刀だった。

「君は神を侮辱するきか！」

「そういうわけではないんです。僕は武偵なので人を殺すことは、できません。それに貴女のようなきれいな人を傷つけるのは、僕の血が出来ないんです」

「き、きれ…：そ、そうか。今回は私の負けだ。近くに來い勝利の品をくれてやる」

顔赤くし神はキノに言う。

キノもそれに従い神に近づく。

「私は、守りの神。その神からのお守りだ。良く効くはずだ」

言い終わると神は顔を真っ赤にしながらキノにキスをした。

その瞬間世界が回りキノは、目を覚ましたのだった。神のメッセージを聞きながら。

「ゆ、め？」

最初は夢だと思ったキノだったが唇に残った感触に気づきまた顔を赤くする。

「キノ！目を覚ましたか！でも顔が赤いぞ？」

「きーくんエッチイ夢でも見たの〜？」

「なっ！どんな夢だったんだ？」

そして質問責めに会うキノだった。

第7話 もう1つの戦い（後書き）

いかがでしょうか

僕も友人に教えられてないので神の名は分からない設定です（笑）

実際は多分あいつじゃないかな

ではアディオス！

第8話敗北後の一時

ここは、イギリスのウエールズ、イーウーにも知られてないジャンヌのアジト。

今は、回復したキノとジャンヌ、イージスそれに理子が特訓をしていた。

「り〜こ〜！これ何の意味になるの〜？」

キノは、滝の下の岩にくくりつけられかれこれ三時間ぐらい滝に、うたれていた。

「ん〜と、意味あるのかな？」

理子は首を傾げて答える。

「安心しろ。この本がはつきり読めるようになったら、離してやる。但しこの本を読むためには、魔力を高める必要がある」

ジャンヌが緑のカバーの本を手にとってくる。

「？えーと。魔法の書 魔力が少ない者が使うのを禁ずる」

キノは、普通に読んだので理子とジャンヌは、顔を見合わせる。

「キノ、本当に読めるのか？」

ジャンヌがもう一度聞く。

「読めるよ〜！。まさかこれが読めたら死ぬとか？」

キノは、自分で言った事に青くなったのか、ただ寒いのか分からないけど、真っ青になった。

「そうゆう意味ではないのだが、これはタイトル道理の本だが、まさかこんな短時間で読めるようになるとは思わなかったのだ」

「そうだよ！私なんな何ヶ月もかかったのに」

理子も続けて言った。

「キノ。それならこのページを読んでくれるか？」

ジャンヌが開いたページは、文字が敷き詰められていたが、キノには余裕でよめた。

そして、解放されたキノはそのページを読んだ。

「素材は我が魔力と希望
土台は石と 契約の大公
激しい雷撃からの庇護

全ての門を閉じる王座を発て王に従い分岐を巡れ
全ての時はただ壊されているに過ぎない

汝は我に全てを委ね我が意は汝の剣に全てを委ねる

それは身体を礎とし汝がその意思と理性に従うならば応えよ
誓約はここにあり

我は全世界の善なり

汝は三の言霊を抱きし天空なり

来たれ 抑圧されし円環より 偉大なる過去の剣豪よー！」

言い終わるとゆっくりと魔法陣が書かれて行き、それが書き終わると2つになり上に浮かんでいく。そして2つの魔法陣の間で大爆発が起こった。

「きゃっ！」

「マスター！」

理子が悲鳴を上げ後方に飛ばされ、イージスがジャンヌを守った。そんな中キノだけが微動だにせず、魔法陣を見ていた。

「やあ！また会ったね。君が私の主かい？」

現れたのは、言峰綺礼によってキノに入れられ、キノの中で戦い負けを認めたはずの神だった。

だがキノは、前回と違い目の前の女性が、神だとは思わなかった。

「その通りだよ、マスター！私は君の、先祖『アルトリア・ペンドラゴン』君の中に入っていたのは、中東の守りの神『ホーリ・エルフ』私の姿をしていたのは、偶然だけだね！」

キノは何も言わず代わりにイージスが訪ねる。

「セイバーの精霊が出てくるとは、流石に今回のマスター達は大物揃いですね？」

ジャンヌと理子は首を傾げて何のことかさっぱり分からないようだ。
「イージス。セイバーの精霊とは？」

ジャンヌが、イージスに訪ねる。

「私達、精霊の階級みたいなものです。有名な神や、力のある英雄には16ある階級の内どれかが付きます。それらは、基本変わる事はありませんが、階級を持つてない精霊が階級を持つている精霊を殺すと階級が移ります。因みに私は、イージスの精霊です。階級は主にアスカルドの13の神の名とその他3からなります」
イージスが言い終えた後にアルトリアが続く。

「基本精霊は、マスターの命令に従いますが階級のある精霊は、その階級の名を誇りに思っているので、必ず私のことはセイバーと呼んで下さい」

未だに三人は、状況が分からないのか、返事もせずに呆然と立つていた。

「それなら理子はこの辺で帰ろうとしようかな〜！」

三人の中で一番に動いた理子がそういつて玄関に止めてあつた改造バイクにのる。

「それじゃ、キノとジャンヌ帰るね〜。キノすっかり強くなって私達を、イーウーから解放してね。じゃあバイバイ！」

そう言つて理子は、帰つて行つた。

理子が見えなくなると、キノがセイバーの方に向いた。

「セイバーそれなら僕の事は、キノって呼んでね？」

「分かりました。キノ。最後にあの神からあなたにプレゼントがあります」

そう言つてキノに二本の日本刀を渡す。

「約束された勝利の日本刀エクスカリバーと不敗の名剣（雨月）だそうです」

二本の日本刀をキノが腰に挿すと、ジャンヌがキノに近づいて言つた。

「よし！じゃあこれから修行を始めるぞ！覚悟してついて来いよ。

キノ！」

ジャンヌと理子は首を傾げて何のことかさっぱり分からないようだ。

「イージス。セイバーの精霊とは？」

ジャンヌが、イージスに訪ねる。

「私達、精霊の階級みたいなものです。有名な神や、力のある英雄には16ある階級の内どれかが付きます。それらは、基本変わる事はありませんが、階級を持つてない精霊が階級を持つている精霊を殺すと階級が移ります。因みに私は、イージスの精霊です。階級は主にアスカルドの13の神の名とその他3からなります」
イージスが言い終えた後にアルトリアが続く。

「基本精霊は、マスターの命令に従いますが階級のある精霊は、その階級の名を誇りに思っているので、必ず私のことはセイバーと呼んで下さい」

未だに三人は、状況が分からないのか、返事もせずに呆然と立つていた。

「それなら理子はこの辺で帰ろうとしようかな〜！」

三人の中で一番に動いた理子がそういつて玄関に止めてあつた改造バイクにのる。

「それじゃ、キノとジャンヌ帰るね〜。キノしっかり強くなって私達を、イーウーから解放してね。じゃあバイバイ！」

そう言つて理子は、帰つて行つた。

理子が見えなくなると、キノがセイバーの方に向いた。

「セイバーそれなら僕の事は、キノって呼んでね？」

「分かりました。キノ。最後にあの神からあなたにプレゼントがあります」

そう言つてキノに二本の日本刀を渡す。

「約束された勝利の日本刀エクスカリバーと不敗の名剣（雨月）だそうです」

二本の日本刀をキノが腰に挿すと、ジャンヌがキノに近づいて言った。

「よし！じゃあこれから修行を始めるぞ！覚悟してついて来いよ。

キノ！」

新しい事件

キンジが二年の始めにアリアと再会し、バスジャックを解決した頃、キノはフランクフルト武偵高に帰って来ていた。

「懐かしいな。皆覚えているかな？」

「ここが学校ですか？キノが改まって行く場所でもないでしょうにセイバーがキノの横で言う。」

「あはは！おだてても何もあげないよ？」

キノは楽しそうに答える。

「それに僕は、ここには用はないんだ。僕の故郷に行くんだ。キンジが心配してるみたいだし」

時々くる理子からのメールで、キンジが武偵をやめること、その理由がキノやカナが何とかしようとした依頼の失敗で、行方不明にもなっても、せめられたことで失望したことがあったのでキノなりに色々考えた答えだった。

「キノの命の恩人でしたね。私も一度会ってお礼を言いたかったのです」

「そうなんだ。セイバーって律儀だね。でもキンジは美人に弱いから襲われるかもよ？」

「その時は、キノに守ってもらいます。美人？私のことですか？」
セイバーが頬を赤らめて訪ねる。

「セイバー以外に誰がいるの？それにしても、ここは広くて嫌いだ！教務課まで一向につかないじゃないか！」

フランクフルト武偵高では、依頼板の場所しか知らないキノが、迷っていた。そしてセイバーは、顔を真っ赤にしながらふらふらとキノの後をついてきていた。

「楠か？」

迷子のキノに声をかけたのは、教務課のイータ先生だった。

「やっぱりそうか！神崎から一通り聞いている。どうせお前も東京武偵高に留学するって言うんだろ？」

イータ先生は、Sランク武偵の面倒をみている。といっても報酬の管理や他校のSランク武偵との交流ぐらいだが。元Sランク武偵である事件がきっかけに早期引退したのだ。なのでSランク武偵についてよくわかっており、生徒からの支持が絶大な先生の1人だ。

「違いますよ！先生。転校ですよ。留学なんてしません。向こうの方が好きなんで、どうしても必要なときは、言って下さい。最強メンバーでいきますから！」

「そうか？ならいいが手続きは、自分がやっとくから他の誰かに見づかる前に、速く行きなさい」

キノは、イータ先生の言葉に甘えてフランクフルト武偵高を後にしたのだった。

因みに、セイバーは武偵高の制服を着ていたのでSランクの武偵しか覚えていない（興味がない）イータ先生には、ばれなかったのだ。場所を移してフランクフルト国際空港。そこにキノとセイバーが着いたとき、周りの目を集めていた美女二人組が、キノ達に近づいてきた。

いち早く気づいたセイバーは、警戒をするが後から気づいたキノが二人組に近づいて行くので、少し警戒を緩める。

「隊長！よくぞご無事で！」

目が覚めるような美しい銀髪を腰あたりまでのばしている少女がキノ言う。更に言うと左目の黒眼帯も特徴的だ。

「キノ！心配したんだから、無事だったら連絡ぐらい欲しかったな」

金髪でショートカットの少女が後から言う。

「何を言うか、シャルロット！隊長が死ぬ訳ないだろう！私は全く心配じゃなかったぞ！」

銀髪美少女が腕組みして言う。

「そうなんだ。なら何で毎日教会に行ってたのかな？」
シャルロットと呼ばれた美少女が、意地悪そうに笑い言う。

「そ、それは・・・！。あれだ！キノの無事を祈りに行ってたんだ！」

よっぽど混乱したのか、銀髪美少女は自爆した。

「あハハハ！心配してくれたんだ。嬉しいよ！ラウラにシャル！ありがとな」

2人は顔を少し赤くし後ろを向いた。

「た、隊長！飛行機をよういしています。こっちにどうぞ！」

そしてキノ達は、ラウルとシャルロットが用意した小型家用機に乗って日本に向かったのだった。

因みに、ラウラとシャルロットはキノと再開した喜びで周りが見えてなく、飛行機に乗って少したった頃、セイバーに気づきキノを質問責めにしたのはこの後すぐの事だった。

ここは日本のキンジの家。元々は4人部屋だったのだが、隣の部屋の壁が壊れて？今は、8人部屋になっている。

超能力捜査研究科（以後SSR）に転校を済ませたキノと、強襲科に入学したセイバーが来ていた。

「やっぱりこの部屋がいいよね！セイバーもここでいいよね？」

キノは、荷物（ほとんどが武器）をキンジの家の空き部屋に置きながら訪ねる。

「いいですが、私はキノと同じ部屋なのでしょうか？」

セイバーは紙袋（私服や日用品）をその場に置きながら訪ねる。

「それは狭くなるから止めよう。それにこの部屋は、荷物置き以外に使う気はないし、普段はリビングにいるから心配する必要はないよ？」

キノは軽い装備、腰にSIGSAUER背中に兩月を装備して答える。

「それなら私は隣の部屋にします」

素早く荷物を置き出てくるセイバー。

「どちらに？」

「挨拶だよ〜！」

「こんな天気の良い日にですか？」

外は嵐が来たかのような土砂降りで、雷もなっていた。

「こういうのは早めが常識なの」

そして2人は、教室に行き急いで外に出るのだった。

教室で見たものとは一体何だったのか！

新しい事件（後書き）

友人曰わく、これで原作介入するつもりらしいです。

では、次回をお楽しみに

キャラ設定

楠・A・木乃 くすのぎ・あるとりあ・きの

身長…172cm

体重…58kg

武器（刀）…不敗の名剣（兩月）二刀流用（右手）又は一刀流用。
約束された勝利の日本刀エクスカリバー二刀流用（左手）。

武器（銃）…SIGSAUER R279（右手用）（裏設定…SIGSAUERをもてるのは、認められたら武偵（キノ、ホワイトタイガー、NAOE）のみ使用・所持可能）ベレッタ：キノモデル（キンジモデルとの差5連射が可能。弾数が最高26発）オマケ昔は、ノーマルベレッタ。

能力…蒼い魔法陣の盾をだす（守り専用、消して出し直す以外移動不可）固有結界（任意の相手を結界の中に入れる。自分は強制）以後増える可能性あり。

髪…黒（少し茶髪気味）

目…青気味（一定条件を満たすと色が変わる）

誕生日…不明。イーウーを抜けた日（3月23日）を誕生日にしている。

特徴…天然より、おかしな勘違いをする。以上な程もてる（本人に自覚なし）。家族（ジャンヌ、理子、アリサ）のことになるとヒステリアモードになりやすい（性的興奮でもなる）。キノ設立の「シユバレッツハーゼ」所属で隊長。

上杉有紗 うえすぎありさ

身長…158cm

体重…不明

武器…不明

能力…回復魔法。その他不明

髪…茶色

目…緑色

特徴…キノ事を「お兄ちゃん」と呼ぶ。

誕生日…不明

シャルロット・デュノア

身長…164cm

体重…不明

武器…不明

能力…不明

髪…金色

目…紫気味

特徴…キノ設立の「シュバレッツハーゼ」所属で副隊長。一人称が僕

ラウラ・ボーデヴィツヒ

身長…161cm

体重…不明

武器…不明

能力…不明

髪…銀色

目…赤色（左目に黒眼帯）

特徴…キノ設立の「シュバレッツハーゼ」所属で副隊長。キンジの事を嫁？にしている。

セイバー（本名、アルトリア・ペンドラゴン）

身長…168cm

体重…不明

武器（刀）…約束された勝利の聖剣^{エクスカリバー}

武器（銃）…不明

能力…不明

特徴…キノの守護霊。初代アルトリア。

第9話 空中決戦

キノ達が教室で見たのは、ニュースでアリアが乗っている飛行機がハイジャックされたと知って情報を集めていた武藤達（バスジャックでキンジとアリアが助けた生徒達）だった。

「誰だ！」

いきなり入ってきたキノとセイバーに武藤が訪ねる。

「明日付けで転入する事になりました、楠・A・キノだよ。二年でSSR所属。それで隣のがセイバー。同じく二年で強襲（以後アルト）所属。質問は後でね？」

「そ、そうか。それで何のようだ？」

武藤はセイバーに見とれていたが何とか要件を聞く。

「えっと、ハイジャックされた飛行機ってどこらへん飛んでる？」

キノは場違いな、脳気な声で訪ねる。

「さっき急に高度を落とし東京都心に向かってふらふらしながら飛んでるよ」

不知火が武藤の横に来ながら答える。

「そうなんだ。ありがと〜！」

最後まで脳気なキノは当たり前のように出て行く。

「お、おい！どこ行くんだ！こんな天気の中！」

武藤が教室の外に出たキノに叫ぶ。

「どこって、ハイジャック中の飛行機ですよ」

「この天気の中ヘリの使用許可はおりんぞ！」

「へりなんかいきりませんよ〜！自力で行けますから。あつ！セイバーは、家で荷物の整理でもしててね」

そしてキノの前高さは、腰辺りに青い魔法陣みたいな物が現れる。

「！！！？」

武藤と後から来た不知火は驚き目を見合わせる。
そんな二人の前でキノはその魔法陣に飛び乗り、そして今度は3m
ぐらい前高さもさらに高い所に出しそれにまた飛び乗り、同じ事を
飛びながら繰り返し、まるで空を走るかのように東京武偵高から離
れていった。

キノが教室に行く少し前キンジは、アリアを呼び止めるためにアリ
アが乗っている飛行機の中にいた。

「アリア！」

アリアが乗っている飛行機は、金持ちばかりが使う全個室制の飛行
機だった。

「キ、キンジ！？なんであんたがここにいるのよ？」

アリアは目をパチクリしながら訪ねる。

「これは、武偵殺しに狙われている。」

キンジがそうだった瞬間コックピット付近から銃声が響いた。そし
て二人はコックピットに向かうと、そこには何かをされて動かない
機長と副操縦士がアテナントに引つ張り出されていた。

「武偵殺し！いや理子！もうやめにしないか！」

キンジはアテナントに向かっていう。

「あつれれ〜！どうして理子だと解ったの〜？」

アテンダントは顔のお面をとるような感じで薄いマスクをとり下から理子の顔が出てきた。

「そうよ！なんで武偵殺しが理子だと解ったのよ！」
アリアもキンジに訪ねる。

「アリア。二年前のウエールズでの事件覚えてるか？」
二年前のウエールズの事件、それはデュランダルことジャンヌダルク30世を逮捕しようとしたが、依頼主である言峰綺礼に裏切られ楠・A・キノが行方不明になった事件である。

「その事件の時俺は、キノのペンダントの中を見たんだ。それには写真が二枚あって片方は星伽神社での俺とキノ兄さんにアリサに白雪で撮った写真。もう片方には、キノとアリサジャンヌダルクそれに理子が写ってた写真だったんだ」

キンジの推理は、正しく見えるのだが肝心の理子が武偵殺しだという理由がなかった。

「それだけじゃ理由になってないはよ」
アリアが突っ込む。

「後は今の俺が直感でそう感じるからかな」

第9話 空中決戦（後書き）

そなんでいいのかキンジ！まあ結果オーライか！次は理子とアリアの直接対決です。それとキノは飛行機に追いつく事が出来るのか！？全ては僕の気分です。以上あとがき？でした。

アリア対理子 頑張れキンジ！

「くふ！キンジいいよっ！そういうキンジは惚れ惚れしちゃうな。興奮しすぎて殺しちゃうかも」

理子は途中から、人変わったように喋りだす。

「理子！兄さんもお前が殺したのか？」

キンジはふれてたく無かったが意を決して聞く。

「そうだよ。でも死んではないよ。イーウーに来たら会えるんだけな」

「！ふざけんな！兄さんが犯罪集団の一員だと？」

キンジは混乱したのだろう。頭を抱える。

「キンジ？大丈夫？あんたは安全な場所に逃げなさい！」

アリアが銃構えながら言う。

「ダメだよ！そんな事言っちゃ！オルメスは、パートナーがいないと力を発揮しないんだから！」

「理子の言うとおりだ。アリア。それに理子が言っていることが正しいなら、あいつは兄さんの情報を手に入れる鍵なんだ！」

キンジは食い下がらなかつた。そしてベレッタの安全装置セーフティを外す。

「分かつたわ。でも理子は私が1対1で捕まえる。もしもの時は手伝いなさい！」

そして理子に向かって飛び出しながら銃を撃つ。

そして2人は、零距离から互いの肺や足を狙い、互いにそれを腕や肩を使って銃口をそらす。これは通称アルカタ-近接格闘といい防弾制服をあらかじめ着て行くとされている打撃戦だ。防弾制服を着ているのでマグナム程の火力がないかぎり零距离でないと打撃にもならない。

そして互いに弾切れを起こしたのか、距離を置いて抜刀する。が、理子は手に刀もナイフも持ってない。

「キンジ！」

「ああ！」

手でバタフラナイフを開けながら、理子に迫る。が、理子の様子がおかしい事に気づき立ち止まる。

理子の髪がわさわさ動き背中中に隠していただろうナイフを握っている。

「あははっ！驚いてるの？オルメス！やっぱりお前は何も知らない。キンジを使うどころか、自分の力すら使えてない！」

そしてアリアに向かってナイフを振り下ろす。一撃めはかわしたみたいだが、二撃めはアリアの頭掠める。

「アリア！」

俺はアリアを抱えて理子から逃げようとするが、その時飛行機を激しい衝撃が襲った。そしてアリアのポケットから鳴っている携帯が落ちそれに理子がでる。

「冷たい！わっ！雷鳴ってるよ。行くの止めときゃ良かった」

東京武偵高を出たキノはアリアが乗っている飛行機に向かっていった。

「ありゃ！どうやって動いてる飛行機の中に入るうか？」

目的の飛行機が見えた所でキノは頭を抱える。そして携帯を出し電話をかける。

「あっ！もしもし？アリア？あれ？その声は…理子？まあいいや。

その飛行機の入り口開けてくれない？あれれ？よく考えたら理子は武偵殺しか！でも外寒いから開けて〜！えっ！いいの！じゃあ今すぐ開けてね！」

電話を終えてらしい理子は入り口に行きおもむろにドアを開ける。

「おい！理子何するんだ！」

俺は真つ青になり理子に怒鳴る。そして空気が外に持って行かれる。「くふっ！キンジの大事な人がすぐそこに來てるから入れて上げるだけ！」

言い終わると入り口に青い魔法陣みたいなのが一瞬出てくる。そしてその上にキノが飛び乗り飛行機の中に転げながら入ってくる。

「ふう〜。あれ？キンジ？なんだキンジもいたんだ！」

キノは余りにも普通に出てくるから一瞬戸惑ったが、ここは飛行機の中外から入ってくるって事は普通ありえない。そしてキノは死んだはず。なのに目の前に普通に出て來てる。

「アリア！その傷はヤバいね。早くラッツォ使って！理子は僕が相手するから」

そして刀を上段に構える。

「ああ！任せた！」

俺はダッシュでアリアが使っている部屋に向かう。

「いや〜。理子と戦うのはいつ以來かな？」

キノの口調は変わらないが、距離を空け理子との間合いをしっかりとっている。

「二年ぶりかな？でも本気でやるのは、初めてかも。お互いにそうでしょ？」

理子もキノの攻撃に警戒しながら間合いを取る。

そして雷が合図だったように二人は、地面をけり一気に距離を縮める。

キンっ！

大きな火花を散らし二人は鏝迫り合いになる。

「セイバーも剣の達人だからより強くなってるね。でも二刀流じゃないキノは、役者不足だよっ！」理子を背中に隠していただろうナイフを髪で握りそれでキノを襲う。

「あつぶな！くう。盾さえ出せば何とかなるのに！」
キノは何とか交わし嘆く。

「くふっ！あの盾は動かせないからここじゃ、飛行機乗る時みたいに一瞬が限界なんだよね」理子は勝ち誇ったように言う。

「よし！銃使おう」

おもむろにキノは吹きノーマルベレッタを抜き理子に向かって撃つ。
バン！バババン！

キノは容赦なく打ち続けた。そして遂に理子の髪を捉えナイフが落ちる。

が！

その瞬間飛行機が大きく揺れ理子は入り口を開ける。

「キノ！今回はキノの勝ちだよ。でも今はやらないといけないことがあるから捕まるわけにはいけないんだよ！」

そう言い終えると入り口から理子は飛び降りていった。

そして入り口を閉めようとする。

「！」

キノが二つのミサイルを見る。そして両手を前に突き出しミサイルの軌道に青い魔法陣みたいな盾をだしミサイルを、飛行機に当たる前に爆発させる。

「理子の奴にも困ったものだ。ミサイルまで用意するなんていつもと口調が違うキノが小さく呟くのだった。」

俺はアリアを部屋に運ぶとラッツオ事復活剤で瀕死のアリアを助ける事に成功した。

丁度その時アナウンスが入る。

「アテンションプリーズ。この飛行機をハイジャックしていた者は排除しました。なのでお客様はご安心して下さい。正しいまだ何かあるのか分からないので部屋からは出ないで下さい。そしてこの飛行機に乗っている武偵はコックピットに来て下さい。ふう〜。」
最後にため息が聞こえた気がするが、キノは何とかアナウンス出来たようだ。

そして俺達はキノの指示に従いコックピットに向かう。

「久しぶりだね。キンジにアリア！まさかこの飛行機にキンジが乗っているとは思わなかったけど。劇的な再開って奴だね！」
相変わらず脳天気なキノから緊張感が伝わってこない。

「質問はこの飛行機をどうにかしてからでいいよね？」
キノの質問に俺達は頷いた。色々聞きたいことはあるけどまずはこちがざ先だ。

そして俺は途中で借りた衛星電話で武藤に電話する。

「武藤？俺だ。遠山だ。知らない番号からすまないな」

俺は一通り状態を説明する。（理子の事は言わなかった。）

そして武藤から最悪の事態だと言っことを聞く。

「そうか。自衛隊がこの飛行機を迎撃ね」

それを聞いていたキノが電話を俺から奪い武藤との連絡を切ったがその時に飛行機の通信機に連絡が入った。

「こちら防衛省。君たちのことは、聞いている。後は自衛隊の飛行機についていってくれ」

一方的に言われたがそんな事聞くわけがないどうせ武藤から聞いたとおり海にでた途端迎撃されるに決まってる。俺がそう言おうとし

たとたん、電話を終えたであろうキノが帰ってくる。

「いいですよ。ただ海に出た途端迎撃とか考えないで下さいよ？それに日本の滑走路は使いません。僕の使いますから」

僕の滑走路？キノは何のこと言ってるんだ？

「君は誰だ？」

防衛省のお偉いさんの質問にキノは答える。

「東京武装探偵高校二年。及びドイツ軍直屬部隊シュバレツハーゼ部隊隊長。楠・A・キノ」

キノ言葉に防衛省のお偉いさんは言葉を失い。そしてだめ押し。

「今自衛隊の飛行機の後ろに僕の部隊の者がつけてるから変なまねしたら撃つよ？」

キノは軽く脅し通信を切る。

そしてドイツ軍の飛行場にキノが運転し着陸は復活した機長達に任し何とか地上に帰ることが出来たのだ。

結局の所俺達はキノのおかげで武偵殺しこと、理子を追い詰め、飛行機の乗客を無事に帰すこと出来たのだ。

そしてこれは俺の予感だがこれから一般外れの生活が始まる気がする。

おかつけ戦姉妹（アミカ）一乃！？

武偵殺しとの事件が終わり次の日の朝を迎えていたがキノのテンションは低かった。理由は簡単今日はキノの転校初日それなのに未だにドイツにいるからである。

「あら！キノ？おはよう朝から元気無いわね」

朝アリアがキノを見つける。

「ん？アリア？そう見える？」

「まあ。転校初日を行かないのはやる気なくすわね。そうだ！せっかく再開出来たんだから、どこか遊びに行くわよ！ほらキンジも誘って行きましょ！」

アリアはキノを元気づけようとしているのか提案をした。

「いや！まだ間に合う！」

キノは電話は出して電話をかける。

「もしもし？シャル？最高速の飛行場用意できる？そう！じゃあすぐ行く！目的地は東京武偵高！」

キノは転校初日の登校を諦めてなかった。

「アリア！ありがとう。でもまた今度でいいや！先に日本に行ってるね！キンジ！尾行少しは上手くなったね？」

キノには全ておみとうしだった。

「キノ…時差忘れてる」

アリアのつぶやきはキノには聞こえなかった。

場所を変えてシュバレッツハーゼ第2飛行場。

「隊長！準備万端です！すぐ行けます！」

キノがついた頃には、シャルロットは全ての準備を終わらせていた。そしてキノは日本に向かったのだった。

日本についたキノは愕然としていた。理由は簡単1日の授業が全て終わっていたからである。ただ欠席扱いにはならず武偵高だけの任務での休み扱いになっていた。

「お帰りなさい。キノ任務ご苦労様でした」
家に戻ったキノをセイバーが出迎える。

「ただいま。セイバー。僕もうねるよ」
キノはふらふらとベットに向かいパタンの効果音が似合う倒れ方をし眠りについた。

セイバーは様子を見て大丈夫と判断してから自分のスペースに向かい眠りについたのであった。

キノは朝から元気一杯だった。

「セイバー！学校行くよ！早く、早く！」
子供のようなセリフを言いながらもキノが向かっているのは、バイク置き場それも魔改造済みのNSR250R・89。なんと最高速度200キロ燃料も充分入る。しかも車検もパス済み。

「キノ。バスで行きませんか？」

おびえたような声でセイバーが言う。

「え？嫌だ！」

キノはあっさりスルー。

そしてエンジンをかけて学校に向かう。しぶしぶ後ろに乗ったセイバーはすでにキノを強く抱き締めている。

「サツイコ〜！」

キノのテンションは既にマックス。後ろのセイバーは声も出さずひたすらしがみついている。今の時速は、150キロオーバー。普通に速度違反がここはあんまり法律は関係ない何故なら今キノが走ってる所は東京湾に浮かぶメガフロート。ここには武偵高の校舎と少しの一般の店しかなく警察はいない。

そして校舎に着くとセイバーの案内で教室に行く。

そして午前中の一般授業を終え午後からの専門授業も終わらせたキノはSSRの校舎を出ると背中を震わせダッシュでNSR250R
・ 89に乗り後ろを見ないようにして逃げる。

「まさかあいつがくるわけないよね」

キノは逃げながらつぶやき自分の家に帰る。

「キノ！お前も俺の家に住むのか？」

帰るとキンジとアリアがドイツから帰っていた。

「キ、キンジ。良かった〜。僕ストーカーに追われてるんだ！」

キノは一息つきながら言う。

「は！？なら捕まえればいいだろ？Sランク武偵さん？」

キンジがキノに言うと同時にベランダに誰かが入って来た。

「誰？」

いち早く気づいたアリアが銃を抜きながら訪ねる。

「私？私は森塚一乃、15歳」

そして部屋に入り、彼女はしゃりと長い黒髪をかき上げる。

「キノ先輩をおっかける、健気な美少女、断じてストーカーではないわ」

キノは逃げようとするが森塚一乃に捕まる。

「先輩。私をほつといても無駄ですよ」

悪魔の笑みを浮かべている森塚一乃にキンジが訪ねる。

「それで一体どういう関係だ？」

「キノ先輩の戦姉妹よ！ベルリンのだけど」

キンジとアリアはストーカーと言いたかったがこらえた。

「で、一乃。お前は何をしに来たんだ？」

キノが一乃の手から逃れながら言う。

「分かってる癖に！。そんなに言わせたいんですか？」

「そんだよ」

「先輩の戦姉妹になりに来たんです！」

再び逃げるキノだが今度は自分の足を踏んで終了。

「仕方がない。ワッペンは？」

キノが聞くと、一乃がキノに安全ピン付きの黄色い付箋見たいのものを渡す。

「よし。始めるか」

キノはいい一度目を閉じる。

そして目を開くと何かを言う。

「我が魔力、我が世界、我が魂」

そしてキノは両手を突き出す。

「開け！全てを弾く盾、蒼天の盾！」

キノと一乃の長いようで短い戦い？

周りは全て青い世界にキンジとアリアはいた。

「ありやりや？キンジとアリアも来たの？僕許可したのか？」

キノは首を傾げキンジとアリアを見る。

「まっいつか！」

「なにがだよ！キノ？」

キンジが叫ぶ。

「一乃は二回目だからいいとして、キンジとアリアには説明するね？」

キノはくるくる周りながら説明しだした。

「この世界は、この世界にいる人全員に対応する力があつて、この世界にいる人全員はその本人が受ける攻撃から守つてくれます。ただ打撃系だけ対応で呪いは防げれません。そして複数方向から攻撃をつけた場合はどれか一つしか防いでくれません。わかりましたか？」

最後は何故か先生口調のキノの説明が終えると、腰に手をあて真っ青になつて一乃を見る。

「一乃さん。武器忘れました」

馬鹿がいた。キノ以外の全員がそう思い呆れた。

「前もそんなこと言つて」

「Aphasia！」

キノは一乃が言い終える前になにかを叫びその後から一乃は、口をパクパクしてるだけだった。

「一乃。言つて良いこと悪いことは区別しようね？」

満面の笑みを浮かべたキノがいた。一乃は一向に言葉が出る気配はないく、目を見開いて口をパクパクしていた。

「あ！キンジとアリアは心配せず少し休んでいいよっ！間違えて巻き込んだだけだから」

キノは一乃から少し距離とる。

「じゃ解くよ。アクシア」

「馬鹿！アホ！やつぱり大す・あら？声出てる？」

キノの殺気が一段と強まる。

「えっ！は、早く始めましょうか！」

一乃は声が出ないのの良いことに口走ったようだった。

そして急いで槍をだしキノを襲いしたが、全て青い魔法陣みたいな盾・蒼天の盾で防がれてしまう。

「くっ！っ！ふう！せい、やつ！」

一乃はひたすら攻める。が全て防がれてしまう。

それからしばらく時間が経ち。

一乃のお腹が鳴った。

「一乃？」

一乃が顔を赤らめたのでキノが訪ねる。

「ち、違うの！」

「おなかすいたね？」

「だから違うの！」

「アミカ諦める？」

「うゝ。ちがうの！ちがうのゝちゝがゝうゝのゝ！」

急に一乃が壊れた。そして槍を捨て子供みたいに駄々をこね始めた。壊れた一乃にキノもどうすればいいかわからずオロオロする。

「い、一乃？キンジどうしよう？」

キノがキンジに助けを求め。

「アミカにしてあげればいいだろ」

キンジの声を聞き一乃が動きを止める。

「で、でも〜！」

キノの声を聞き駄々をこね始める。

「やゝなゝのゝ！なゝるゝのゝ！キノのアミカに、なゝるゝのゝ」

一乃の駄々つ子に遂にキノが負けワッペンを一乃に渡した。

「なんか前に似た展開だけど、よろしくね一乃」

「こちらこそ、ふつつか物ですがよろしくお願いします」

「なんかおかしくない？その挨拶」

キノの言葉を見殺して一乃は大はしゃぎ、そして結界からでると書類を取りに行くといいすごい勢いで出て行った。

「晩ご飯作って待つとくか」

キノは呟きキンジとアリアに何が良いか聞くのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1805t/>

緋弾のARIA+

2011年12月24日23時50分発行